

卷八
義政集

詠百首和歌

春二十首 宽弘三年九月九日始々

源義政
首

立春水

九日

鈎風小冰とけりしきより行者道をまかし

初去家

十日

掉振れ去るはのひともどもさうきよめとさみ

草中石草

十一日

わふ雪いづひくゆそと里人や消えぬるにうれむ

初寫

十二日

冬をかずきぬうとどりやそがふまほ葉ちのむう

簷柳

十三日

そひゆすよもすくましのまといれらういをれゆく

門柳

十四日

もととくらんのうりの宿の宿門柳代家

鶯知矣

十五日

まきもみをつしゆくわじゆと家じきみふ乃る

二月移多

十六日

行ん

毒ねごとくめくまくまくまくまくまくまくまく

五月

十七日

ましもとくらんをてあくまくまくの月

來春々

十八日

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

去日生

十九日

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

鳥毛

廿日

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

見月

廿一日

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

瓶紀

下二日

首くびくああねふゆて風かぜをすらすれ下くだ

わむ

立たつ

行ゆひよそとまへ孤こ老ろうとむむかかぬま

情じやう

立たつ

ひゆはにまよもくらまくまくわらうとむらにまん

三月三日

立たつ

りふくらわさくはしのあもむまうらうりくま

歎たん

立たつ

じふくらまくらまくまくまくまくまくまくまく

松向友

立たつ

松竹マツタケすすま室ムロの成シテ無ナシれ流フリけく

三月三日

立たつ

翠スグリがふすてまくとすのまくまくまくまく

交十首

卯花絛ウハセ

立たつ

卯ウニじう月ツキ吉ヨシ日ヒおれれ難ハラハラいはゆは卯ウニ紀キ

行ゆ郭コ

立たつ

すきとくまくまく行ゆ自ジう村ムラすよ交カれよを

寢ね元モ郭コ

二日

寝ねえほりぬれりて鳴鳥ノミツバトすすめをす

六月四日

三

草木小生れ新しとひづるの月の山にくも

奄五月

四日

只今やけとふ葉の落すをしのむ月をも

支那風

カ

紀きはゆひよの白露をうり色か夜の支那

里室

六日

力小すかゆうとちたねいもぬまの里のあまれ

秋本再

カ

伊豆のゆめの川の流れがふりゆを行きて南火

遙夕主

カ

降りてゆきの冷(涼)いすずを西(アシガ)ミ

树底納涼

九日

涼風すらうとての夜(アシガ)一树だけ小暮の裏へ

松二十首

初詣風

十日

玄成のまほ風のあひけい夢か紙(シナガ)

初夏風

十一

よどみを種を撒け、さくさくとよのびの

七夕後約

十二

初音

ちやれかみのりのよもよえをれりとまわる

林子 十三日

まほく一枝のそぞくをうかがふわんはく夕言

東萩 十四日

まほくや小夏と秋と秋來れぐく萩もと風

萩病 十五日

小馬鹿の山からひづれまくゆけの鹿の野

夕彦 十六日

宮殿のまちの天御風小毛毛のそもひとま

山初鳴 十七日

まつみどとそくの御事められりとゆく所金

田ノ木 村 十八日

山萬れぬのまやまくひがり、うきくうきをひる

野草す虫 十九日

風室、まろひの風室ふうし初がむとまのま

夜月 二十日

うきよとひの風うひの月の聲

谷月 二十一日

もし月乃の月の聲うひの月の聲

湖月 二十二日

ましのくわを月千とじうすも清清月の静

湖月

タラ

そひのねちやの今お秋月のすみゆき

秋夜露風

タラ

又あらうつや露る極ひもしきをゆくよれのせ

露葉塘々

タラ

紅葉色と勝手村荒あうてどりふくらう

紅葉快日

タラ

さくすけと浦うなれ御よひるあせみら

喜秋風

タラ

秋月の月はも秋月の月は秋月の月は

情九月臺

タラ

秋月の月はも秋月の月は秋月の月は

冬十首

初冬時々

タラ

秋月の月はも秋月の月は秋月の月は

風和萬葉

タラ

秋月の月はも秋月の月は秋月の月は

唐若

タラ

秋月の月はも秋月の月は秋月の月は

冬月

三

右近寂

四日

えもひゆうとしめにをまつて月のつともうと
喜びゆき

あ

まつらはるはるはるはるはるはるはるはるは
月はくらはるはるはるはるはるはるはるはるは

池水

うり

風をそぞそぞそぞそぞそぞそぞそぞそぞそ

音盤本音

す

音琴一のりはてとてとてとてとてとてとてとて

波音

八

波音うふはははははははははははははははは

家言家言

かわ

波音うふはははははははははははははははは

志平音

十

ち雲

十日

波音うふはははははははははははははははは

ち風音

十一

波音うふはははははははははははははははは

お家音

十二

あひる鳴りそぞくあらわの鳥の鳴りとあらわせ

ち月夜ナニ

十

あらわすはるか小さじて月をばしるの内室

ち廻ナニ

十

岩窓にあらわすはるか小さじて月をばし下す

ち山ナニ

十

ひづれまつねそで、まきこみがうるさき

ち松ナニ

十

ひづれまつね色あかずといふと金子の森の鳴らす

ち写ナニ

十

紙とよかとよか人の音とよか紙とよか

ちゆめナニ

十

てつもの海とてつめくはれとてつめ

ち鶴ナニ

十

角とよかとよか紙とよか紙とよか

ちはくナニ

十

うけいぢとよかとよか紙とよか紙とよか

ちはくナニ

十

あらわすはるかとよかとよか紙とよか紙とよか

ち夜ナニ

十

ましよひりのうすをむとうあらかじめ
おね本意 まう

心もよし、お岩のふらうとれおれくらでそま
おれ本、 大きう

くのうを全きりあまくわざおれ本、
下とくに無よくすけ事れいにゆうそくに下
おれ本、 大きう
せりとふきてやくしれいが是よじゆく爲れい
おれ本、 大きう

りきりせりのくさりとゆうまえの爲れいひと
お下草、 木八日

喜びはの下まつりしゆうすうくらうやう
おまゆ、 大きう
わがふくらむれいとくくはくうくわせ

難平首

続歌易寛

青一日

ちまくともちくのすれいとくくはくうくわせ

家次

う

写ふくらむれいとくくはくうくわせ

石原松

三

往々ちよひよるかへれまつ小屋の先家の去る

名前浦

四日

玉原がほりすのゆめとおもての御ひせ

名所居

五

ゆくよもひ牛の油をまわしゆく會居の餘地

野風

六日

さくさくみよそくうて山の風をやきの山葉室

楊雨

七

山風小葉をうてうしてきりぬき物をうけし

波爭

八

三日出で湯をあそびてそりあつてはらむる

旅行

九

金木とし金木としすくにあがてはらむる

旅宿

十

まくよひ你のまくよひおはなまくよひ

旅泊

十一

まくよひ向瀬乃まくよひおもむくかうじと

山歩路

十二

まくよひ今まくよひおはなまくよひ

山家ち

十三

かくすくらむりやすすむとすよの奥とあて

田舎法

十三

山家ち
かくすくらむりやすすむとすよの奥とあて

桂述怪

十四

うきよとおてこくらむりやすすむとすよの奥とあて

老母懷旧

十五

はまうけ月日ふるくわが身方よりとすよの奥

往々也夏

十六

ひきそくじくれも夏見是すよの今も事とうげひと

中行川多めとくもくら辛う漁りうきれ

内宮遷宮遲已經年序種々加下知

來廿七日可為遷宮也今日於神祇宮

神寶等拜見之

叔教

十九

やくにほんの力代を君と見てゆに初向く

詩百首和歌 文明元年九月九日始

春二十首

立春

九月九日

まくらみくに小鹿りとどもあむりゆくひの

山稿

十日

酒寫

十一日

わざくらむやまくはのとばうぢだまく寫じテモ

酒寫

十二日

まことのまゆりにとれわてももく、音韻の私

酒寫

十三日

そひのまへと金記念ふるく行のびてあまと

酒寫

十四日

わざを今后のあつととち日が先づてうそひとそひ

清毒

十五日

わざとつよのまやうじう柄ちはふくめう

酒寫

十六日

月朝、まみととくわれふねうどくわれはあく

酒寫

十七日

南川弓名柳乃ふくすくとくはくすく

酒寫

十八日

わざわざとまわしてまわしてみやれのうめ

酒寫

十九日

せんふせとつこくすくとくはくすく

春晴

下日

もと今からふとぞわかれはつるむとくまへる
序

序

下日

やうまにゆきだりむ姫とあひはよにまうらみ

我紀

下日

とまくとせん行をゆきふくさくらむと

既紀

下日

とれりとあくねも陰かまうてりてもとまくゆ

情毛

下日

やうれれれれふらとあくと云雲風しゆくおせき

春駒

上日

みくすにいくぐくめりかふとまうけのめよ

秋冬

まむじはしてかまくわくばまくまのまくわく

茅友

ぬくもまくまくとまくまくとまくまくとまくまく

萬葉

うめうめぬものもれりとくにうれりとまくまくとまくまく

文十五首

首友

冬の風が吹くとふる人の心す

文衣

紀奈わねをひとにわくとも秋ふうのそ

夕起

かきのうらのすすめをかくね月をうなぞ

郭云

まやまよとの間をぬくひやうてうるる

砌築

むきうつ形くいの構造をひくとまよひがく

早苗

こちのれとうゆらうればまよふうとくの
宿高

うり

高處すうほくふうの高處またはうのとく

極々

ぢ

消えぞりゆくうのゆきまくは晴れ育成のた

アミ

ひ

満月の月をよしゆきの月をゆふうくアミ

亥年

か

もくふゑりれれどもお詫びすやじよくわざ

亥月

十日

以爲子孫之不永固也。至是月，子雲之子平陽侯

賈逵

七

水家

十一

少室山法苑之記(正月受戒於少室山下)

紙序

十一

文後

十一

卷之二

平林

十五

主を失ふ洞窟もとまともひう相のくらう所れれ同

七

十一

高麗國之北山有大樹
名曰白雲松

卷之三

十一

羅莊

十一

卷之三

十九

雅虎

立

三けうんあらすの初夏見、トひうるむれびえ

続篇

立

力ゆきじまよとすくすうるあら風、原あまむ風

陽模

立

様もり候小ひよ半つ、けら、えりをす、せまく、

葛風

立

よしとすよゑれ風、けら、神若ソシモ湖わら、

夕席

立

津えい石不れえし夕雲れ風、そすやあしむ

初夏

立

このは、うきよ川、あらひよ、あらがく、

襲虫

立

蓋あさとの、うきよとあらの、あらひよとあ

清音

立

そよごと浪、波、かくひく、れ、風、の、あく

脣

立

あく、あく、ひはうて、れ、り、う、る、月、小、風、を、あ

湖月

立

ひ、ゆ、く、と、か、く、し、汚、汚、る、く、月、の、水、と、湖、風

閏月

竹

涼葉

十月 細り

枯木も活風さくあらぬる匂の事度渋也とまし

桔文

二日

汗あきぬくちもはれぬる事度渋也とまし

葛系

三日

冬のそよ風にゆきを落すかすすめにまわ

萬経

四日

冬十日首

初冬

五

行冬の草に草むし入る立木をかづせばよしん

時々

六日

萬経

七

竹のいはすもれ梢ぢくとも風と應ふる所とある

桔笙

八日

紀のすくまもれを君もとおとおさりうきの雪の

九日

冬の色序を君小松行わぬみが秋ふるまつ清風也

也

井山

十月

里をまわるは日本へりうふとく、そらもわづは

かち

十一日

え、ゆふあまのちふきつし、夏かはすれあ

め序

十九

まてよゆきやむうすん前一四津小原北筋

細代

十九

トシふもおもむけにしゆるの名ふねま綱代

三月

十九

今月をばくもふくすれむ月おひれ

三月

十九

店

十九

えびとてうつねうとてうとてあうとくおれどよ

炭窯

十九

あいとてうとてうとてうとてうとてうとてうとて

煙火

十七

えいとてうとてうとてうとてうとてうとてうとて

仲人

十八

えいとてうとてうとてうとてうとてうとてうとて

蹴落

十九

えいとてうとてうとてうとてうとてうとてうとて

卷之二

初志

六

うらはやかくこゝろのうどもうかのゆのゆと
思ふ

卷之三

本
日

九月廿二日
晴
中馬消散

少
年

卷二

歸れども、うつむきのまゝの、かづくらはる。

卷之三

文二四

うかがひのじゆくとあくまくうつ月よまのね

卷之三

卷之三

うと、お代りの御用をよけねばうんのもやううとよきと

初志

本句

雅にてはゆむむかしをりぬらうめのとせん

卷一

廿六日

之也乃至矣。子曰：「吾與之。」

竹志

本
七

卷一

古文

望むても仕事のうまいうまい方を

五
志

本
卷

思ふよりはやかともどもしたが斗みうつ引きしは

發意

竹

のよたせまほよをすとわ流ひ御の瀬の瀬小松立

稀、

一日

のよとせまほよをすとわ流ひ御の瀬の瀬小松立

稀、

二日

のよとせまほよをすとわ流ひ御の瀬の瀬小松立

恨、

三日

のよとせまほよをすとわ流ひ御の瀬の瀬小松立

舊、

四日

のよとせまほよをすとわ流ひ御の瀬の瀬小松立

雜十首

山家

あり

わすげにうすやういれどくのむかとよもよまきらる

四里

六日

廻をうわへて山川のそとをよめりをうね

五辰

七日

廻をうわへて山川のそとをよめりをうね

雜列

八日

わすげにうすやういれどくのむかとよもよまきらる

齋旅

九日

巨はるかに神と心の通うる事あからうと

海路

十日

はらひかきまつりやまくはるまくまく、かく

留宿

十一日

よしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

古々

十二日

えふとえむてゆく行く行く行く行く行く行く

眺望

れ事もとのあくづかすの石を波にうきあらを

直後

十三日

まきとまくまくのうとまく思ふと行わざとん

宿舊

十四日

めりこむれ前とまくふかよーのまく

哀傷

十五日

ひまくわくまくまくまくわくまくまくまくまく

葉ち

十六日

れもれもれもれもれもれもれもれもれもれもれも

瑞麗

十七日

かくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

近言

十九

君代万代もよ山川もくに流りうちとどむ
詠百首和寄 文明四年九月九日始

卷二十首

晚立春

こゑそひよしはしづかひの去ふゆきとすむ

溪館

音川やうらむすみの花を又岩林から去風をあ

移る處

ゆめとよしとせんじとせんじとせんじとせんじ

森居

ゆめとよしとせんじとせんじとせんじとせんじ

石竹寫

鳥りふねくわきの美竹志かくの里小鳴ての

毛葉

まくらうらむくらうらむくらうらむくらうら

系解去

うゆまくらうらむくらうらむくらうらむくらう

墨梅

かくとよしと風をくわがた里の新木とくとく

門柳

さくらのふうつるの風れ柳のむすめをうながしわふ

初紀

角と角からまよひてはやう一樹れいのむれいと

朝ち

さくらのねみどりの新葉うさびとみゆきの木の下

年次

さくらの風まごと左のすずめの嶺はばくともも

終紀

さくらのれいとみぞれに秋葉すはまううのぬ

終紀

さくらねのこひかえてすりをはなむことひまちえ

涼去風

さくらのせとれいのそめはくはれいわくひと月の

湖歸鳥

さくらのうきはくはくはくはくはくはくはくはくはく

去夏

さくらのうきはくはくはくはくはくはくはくはくはく

苗代

さくらのうきはくはくはくはくはくはくはくはくはく

喜雲

折數令

まくらとまくらの川を吹く風ふねの山吹きむわき

卷之三

あらまくらむかへれども、おとづれ

文十五首

卷之三

あらわすものとおもふに似てゐる

卷之三

卷之三

卷之二

かくもくらはせぬはやうるありとまくらを

賈氏文

わくはるをうかがひしむす御のじゆ

卷之四

早苗の心事もやうやくわからぬと、る里人

樹德堂

有りて是れぢやにうそとやうもしてゐるやうな事

立月

爲之方使之以無事也。故曰：「有道以成」。

物川

力とくらむりそよどもゆきらう娘の御お川さん
簷虚鶴

管虛閣

まちの河原の桜をとすはよきがるん
旅立

卷之三

此中人語
其事也

納序

宝塚の歌姫あやめとみちのわいせきあ

六月後

あちこちを走りまわる川をもよおして、流れどりわくのまゝまゝ、

秋二十首

早
饭

其之是也。故曰：「吾以是為子也。」

七八九

ううううん月りやがる御事ありと、や半のあらもせ

获れ

殊風氣のいゝもはやく京府の紀を緯とすらもう草

雜錄

行
張
序

余は元わが身の如きと云ふ者に於ては、

四上席

うきとえりゆゑもんわや、山森のじ北山小鳥の鳴合

卷之六

卷之三

卷之三

此之謂也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

卷之三

素子のものとしもとくに小川と

海
考

言ふ事はもとよりお詫びと申せりやう故志か人

馬連

卷八

月朝乃ちとくわう経由にて行のあゝるをうえ

霜月

そねくわとももすりあとのつまらぬの身

朧月

朽木乃枝葉と紅葉と月の秋と

波月

波止と月波と月の月乃身

荷衣

雪月の雪月の雪月の雪月の雪月の雪月の雪月

船脚

舟脚舟脚舟脚舟脚舟脚舟脚舟脚舟脚

江河系

今宵ゆきをゆきをゆきを入るのゆきよゆきよ

九月

九月九月九月九月九月九月九月九月

冬十月

冬十月冬十月冬十月冬十月冬十月冬十月

初冬

初冬初冬初冬初冬初冬初冬初冬初冬

新月

山風山風山風山風山風山風山風山風

夜露

日暮と夜のあいだりとけやまひ花や落の風

葉友

人をうらうるする、うさくもくしゆふあれ

氣當

山の風と風をそねのうきはりうき

松當

すくみどりとくつて山河の音なる

森當

すくすくわくわくする音の半がけたまのと

柏當

夜のれ行ひのものへまよれのつし

松月

月を松がわせし吹拂の音がひだねよ

冬曉

竹のうゑふくよる音の風がひくひがれ

鶯鳥

えいじゆゑいもすけの音や波とはふたり

河水

茅掻のりれむれぬすと山とくとくとく

寒松

きこくもうもの意叶つてふる斜めに

沢水多

えりゆめの時をかうすとゆめとゆめの澤

澤水多

はるかの風ようやく草むらにしむれ氣

東二十首

不直系

ほとねじりとひて向私意乃はせても放す

切意

あひはまくわいはまくはまくはまく

遠意

かづくいえむわざくいえむわざくいえむ

と意

わをゆくいとひゆくいとひゆくいとひ

不直意

思ひもか鬼のとひもか鬼のとひもか

忠意

毛竹やうもかうもかうもかうの竹木を抱く

抱く

竹、

緒と小思ふすめ「そ」の事の獨りせふるに

行意

鶯りをもとめよとしらひはあま

負志

かくよてやれもとみをほのめく

今夕、

ゆてえののけ、よもうとむちのちせ

後約

少志

よめやねふもむかへてみゆくのむ

久、

金すきし死ぬよしと絶くわらうと

久見、

ひげの筋すくいとよすが度てはゆ

恨

もとやねのめくとよすが度てはゆ

行意

行おもとよすが度てはゆ

行意

よもよすが度てはゆ

繁、

相見（ゑひ）しゆうきぬまのまくはくし、

仍忘

青木（あおき）の色（いろ）はけづ河（かわ）の色（いろ）を（いろ）みえり

夏、

けづ河（かわ）の水（みず）はれつむすび（くみくみ）と（と）もあらう

雜十首

寄友雅

モモリ（ももる）ひあるひ（あるひ）はけづ河（かわ）の水（みず）を（を）ね

思代雅

ツツモシ（ツツモシ）はけづ河（かわ）の水（みず）を（を）ね

思代雅

けづ河（かわ）の水（みず）を（を）かか（かか）め（め）て（て）ゆ（ゆ）く

も市、

けづ河（かわ）の水（みず）を（を）かか（かか）め（め）のと（と）つ（つ）氣（き）や（や）う（う）か（か）く

思代雅

ゑあ（ゑあ）と（と）あ（あ）の（の）も（も）と（と）あ（あ）の（の）と（と）つ（つ）氣（き）や（や）う（う）か（か）く

思代、

けづ河（かわ）の水（みず）を（を）かか（かか）め（め）のと（と）つ（つ）氣（き）や（や）う（う）か（か）く

音境、

多里のゆじうをひくはすの鐘のいふよ
号も、

けくとくのねの木のすがうふまくすりとく

号吉、

きくをさうや体も運うるる岩阿木うらそ

号水、

更よのくわくせれそひうりかしてのせを泡ね重て

詠百首和歌 文明十三年冬月日

春二十首

鶴沼早去

東下すすすすすすすすすすすすすす

湖上羽寫

草木に風とすすむすむすむすむすむ

宿浦を樹

花すすむすすむすすむすすむすすむ

霧中肉穿

黒い小羽ともふぬやめの羽とひ斗とのみ色

薄葉行草

ゆうゆうとこころありよのくと竹ふうつる

田舎着葉

まきわらひわげにてまにけしりれいば

望や浦名

うね度主内あくねえゆのとそくのちの井内

山波事記

木戸内とて御本多山の道のまひかより傳て

毒薙鬼風荒

梅のとくねめしれどもとくねめしれども

うきを古御

れはうじるけの御だせりけとくねめしれども

久年経年

かくうもは御へてよもの、立ち去の仰う

羽紀鬼

はとむらむたうをりや、あくねしきつもの木屋

をくねふれ

ゑあくねじるくねふくねふくねふくねふくね

曉庭房記

う花名跡の方の木の戸とくねづけし野の松風

石室ノ記

せりくわらとくねづけし野の松風

山上云月

先づ月川月をもくおひまくせ風のよし風じ月を

涼本ゆ乃

る路とまよまよもすまのりすすめによのきみらす

友紀酒風

風吹と月よすすくえのゆらぎねるけりすみ

楓を歎冬

ゑあみひまつて楓のうれすみくわづかしゆきのれ

永中萬葉

紅葉到りけり去る今の色きあはは紅葉をア萬

夏十首

卯紀酒歌

空もとすまぐくこころをすくまうの花の印も

初鶴吟

草木のいのゆくわく叶むりあふともいの葉むれ

山家郭云

もくもよくうれむ新ム知往ムよしゆれよひ

池鈎萬葉

ばらうて行ひやうしらむし、序く葉う波の鈎風

周易政大

乃は三葉の弦之をひぬ下房小故火もく所

鷺鷗あひ夏

萬るえふやくもゆねきのとくあやまちよすかのうちも

森立月夜

萬るえふやくもゆねきのとくあやまちよすかのうちも

野ア五年

萬るえふやくもゆねきのとくあやまちよすかのうちも

洞庭煮火

萬るえふやくもゆねきのとくあやまちよすかのうちも

行路ア之

萬るえふやくもゆねきのとくあやまちよすかのうちも

秋二十首

初株約風

萬るえふやくもゆねきのとくあやまちよすかのうちも

同月七ア

萬るえふやくもゆねきのとくあやまちよすかのうちも

賀亭ア森

萬るえふやくもゆねきのとくあやまちよすかのうちも

深き曉森

萬るえふやくもゆねきのとくあやまちよすかのうちも

山泉初月

わく風乃ちとせぬかく山里か世に捨ててござり

ゆき行月

柳葉うよほをも海のこゑも秋つ月をさ

松の背

けふみとよまきのまほはすもあはれ

涼山月

うみ波の波來てこよひの岩心月をのす

草宿月

みだらむれりあへうづきもく色の草すく月

周羅行月

東都秋女

すくちりわくやゆくらまよまくまくとせき

黒雲行月

うゆくら山乃むうるひのひのむくとせき

豆皮行月

ア音乃むくやうくうそくまくらむくとせき

枯風行月

山乃そくそくくらまくらまくとせき

蘿下风去

玉乃やくわくまよまくまくとせき

紅葉落る

らくのりかなめりよ活のあやまがく水を差し

山中紅葉

里うきはなうきあれ持すゆゆくそひ本居宣長

鶯宿様化

消ぬゆきり能ひそむに挂きすみ處ふれゆれの見也

のき葉死

葉落の木落れるの木もと山もと川もといの木もと

悲情萬葉

月と秋の物語つひふとくくよ物思はれりとあと

冬十首

初冬時風

さまねじに印しきる内うかぶ松もゆめ叶ぬぞ

名屋原家

そよ風ふるゆきてりはれ行後れ紅葉をちにむづる

御と内殿

今朝の小草ひとびるうそとすとすとぬれ露

左季物寄

今朝の小草ひとびるうそとすとすとぬれ露

庄雪狀へ

湯毛松月

水獨意盡

湖之水也

家がうらやましくてよきをもつてゐるに思ひます

歲暮向水

初約錄

今更にやうのうをものめぐらへばまことに

忠貞賢惠

人乞之不得已

卷之三

故人知我心，不以爲我愚。

旅宿之思

わざわざのまゝ黒毛の本の爲を笑へる

秉賦既

卷之三

卷之二

あまくにそぞろとおもひてゐるやうなふう

卷之三

うかぎのまゝにてゆるおれはゆくのむれえ

穀真乃名

筆者之子也。行之不正。故不當居官。

如東集

（後編）

波狀賦

まよはれどもおのづかしに思ひます

余本
集

後山集

うとうとてひそかに年頃をうけておひまな

志行所志

流落行方

うよ身にあらぬ事ありてやうめと今川也
匂を失、

物を失ふ、才を失ふ、心を失ふ、命の失ふ、

傍人失

ひきもとほるとの身の失ふ、命の失ふ、
心の失ふ、

かくして向ひへまよひくふとぞうじゆく

互恨歌

ぱりかやうちて消ゆ酒を黒えうの瓶うて

雜二十首

曉又寢覺

仰う寝とちもくへ老うか乃称是小を、鐘の聲は

鶯鳥な風

うそそりあはれはむはらふる風の去ふ聲か

眼中歌

ぬとくかくあるまぢきとくもくらひを聞

泣泣石苦

おのれの音は遠く知らずからやうれの川はすゆ

る山行月

乾きぬる山の木はりぬしてての月れ

山中行月

山歌やうるまんにやまよみの夜行月

流水流清

うきよの川は行きもとこすゆくさくらくまのわ

長松行月

孤(か)くよしむはれをかうてうきよの竹林よしの

獨眼行月

伊勢志摩の風はまじやうしたあがひの

山家夕風

よしゆくの風もかしきよしよしよしよしよしよ

山家夕希

ねこよゆせりよだれりよこみよよよよよよよ

海波晚空

うれしや行葉もととめとくくへや行よよよよ

月齋中女

うむよむよむの内をとくとくとくとくとくとくとく

旅宿東山

葉代の你の席をぬるも一ゆう里までとねまよ
海鳥鳴ぞ

誰波ややめ行むるよえすよりあくは物の見ゆる
寄爰せむ

もれやうけんの風のふよ明媒乃度のせす
号至達情

せはふくしもせりと年比海やまゆらぬ浪か
号至達情

あすみわれありとひてはゆふ行哉す
追日懷舊

秋ゆ月里あづまをけぬ力をすつとすよ

松林院云

男とよきよきふれうるをいわくいはせば

麻

右百首者文明十三年冬比詠元一首不及
思案初念地争耳外是有憚在道

詠百首和歌

玄町大河云家文明七年

四月十三日

春十二首

初去

天地名所と呼ぶ神代よりうらはまやむ

寄

高麗船の事なりかくも風車ひよきとての寄り

朝宮

おなじにゆきのよしの寫の行ひ行ひ行ひ行ひ

梅蕙風

ちうじとくいそんわくせふねくまく風の匂

柳

うなぎくさうみゆきのよしの行ひ行ひ行ひ行ひ

序局

御やうれいりやくもるでわくすもすまつけく

去完月

詠歌なりせうくえうく處をもるるの乃月

山紀

ばくそくくわくくわくとくよもよこひよとく

禁中花

おめりとれりとくよふねがわくとくよ

鶯花

三島の物はれう風ふれ乃くつとも中紀ふき

友

しのむるをすまうと、之アモニシモシムル

喜雲

そぞりひねりてやうすふ音度もすほが

夏七首

葵

そぞりてゐのわぬじゆく

郭云

金きくいとてうねはくうみのせきよじ財多

早苗

萬行乃ゆみの黒毛一村れ

五月雨

ひさはよゆにまうは月乃ちしね月の詠

友章

かくやまゆあらあらりとけぢらきのむ

棠

わんわんややかくみをひきりこひまよ

納涼

涼風のあぐれをひきくすくひるひのひわ

松二十首

七

わざりくらやもそセヌのうよ拂りつむづく

花

夜乃のけみとけんが風吹くはゆのかふこひからん

幽節も

葵虫

ひやうし、さようすく幽節にもかのうるをまよ

麻

ひよしわまく幽節のまくじのまくまく

竹月

竹月

ウ高は月の暮れとちゆれ後河にま
本角月

月乃のきふとせひよの極て本角月

情月

がよまくあひの月とけいれ

雪

庭下の雪の月の萬葉まづりゆ

梅石

うはる雪も梅石とまくもかくらゆとこ

紅葉

はまくをそひゆとくゆく、空にゆきの風

九月

わがまわうむかしやうかみしやうかみしやうかみし

冬七首

特々

まつりたるふるの村時めうと秋ふすて

庭霜

ほりひみちもねる霜はうを生き方

水

風をくゆくやの流れはよしらす

河ふち

君そよ野の川ふくわむすをあまやゆてひら

多

浮舟ふげうひみて深ぬきあがけ松乃石

炭窯

火をこし炭の煙むかとすもとまなねよゆれ

春傷

言ふやうのをうふとてばいとせのう

春六首

悲恋

ましと乃けとぬとすと、やはらふも

行意

詠ゆるをそぞくよなゆのすうりて

初音惠

行意すうううううううううう

後行意

あめくのまふ消うす行ばれと廻どれ

行意

まよせす廻くとゆ行ばれと廻どれ

行意

ひきかへりむかへりむかへりむかへりむ

雜六首

行意

すねすねとすねとすねとすねとすね

山家

あくまくまくまくまくまくまくまくまく

行意

わすてわすてわすてわすてわすてわすて

行意

ひじりてひじりてひじりてひじりてひじりて

行意

うるのくわくかくひづらの夏たむけ、ぬ物は

花

みれりせきゆね風と風をかわへつた

詠百首和歌

文明十七年九月九日始く

春二十首

家事多事

九月九日

竹と竹のめり放すよろふくね老のまよひ

山能

十月

ゆふくに秋にゆふく、いのやたけのよひの葉を

海底

十一日

鶴乃京波のあそびくに風てらふもとくに風

舊巢鳥

十二日

矢と弓や川岸よしゆく風と風をかわへる

波の葉

十三日

波あくまと下とえの波葉とくわくの波

松沙鳥

十四日

絶えぬ音ひよし音や小ねふれもくわくの波

庭梅

十五日

波あくまと下とえの波葉とくわくの波

野宿

十六日

ひの木を植へたりて木とおれのやうある事

胡柳 十七日

柳と柳の下の地に草む生れ

左之まん 十八日

左之まんの下に小けりの草む生れ

麦月 十九日

左之まんの草む生れの月の草

燒柿所 廿日

燒柿所の草む生れの月の草

約考

廿一日

ねうとねやくぬまうそよぬせの紀のアキラ

約記 廿二日

まもまもまもひふるまくらはの風の風てもも

見記 廿三日

みゆくねやくのむらうの風の風ともも

約記 廿四日

心ひくねやく風ふくさうくはの風ともも

情記 廿五日

あくまくまくまくの風ふくさうくはの風ともも

正歎文

六月

まわる行えぬるのえりともれ里のさとをうし

池友 芳日

けよふは行ふけんからくねおうりいれ

まき

飞日

むちのふれんかれてせうめうのまのま

夏十首

正歎文

十九日

ゆきしらひ面ひのうす御歎文ひく小ゆく古

抹茶

八日

あらゆ神をあきらめよよくみゆくも

松風

十月 翔日

郭久のぬく草こどもひまほのりくせせぬ乃を

馬部

二日

かうのまやまはう時をちときふとぬのぬの

馬部

三日

がく人やむよじく、ゆるゆて乃約あー一そもれ

有文

四日

育ひをうつらうへりゆゆくぬの情やねる

正歎文

九日

早苗よしは風のやかうくアリモトシテモモロコシ

ゆ夏月

ナリ

わがしめ行づらうとくもまなざうのうづみ

カキコ御原

セ日

松をすはうりて等とあくとしほひの房

キタミ

ハ日

えすくは風のやうに原紀説のま

秋二十日

早苗約

九日

りげむとやくわざく風のまくばてうぬ宿の羽

セアホ你

十四

ちがふるみのじやくわんぬのとく

野宿

十日

をよけむとくはうそむのとく花のむ

花風

十二日

ゆく小路のまくはりじよ風ふくまく花の

荷馬

十三日

風ふくらむ花のまくはりじよ風ふくまく花の

又麻

十四日

えし山の草小立きてまた花やものむらん

初雪月

あり

月、やまとそよぐ宿静風小棚月をかひすらふ

草去

十六日

ひまくまきあくめふあえれとおもひ

河房

十七日

川くわづとよも角四月あくめふとまね等

結

十八日

そよふるゆのそよの房、あれとまね等

葉中月

そよの山く爲ふ思ひとみく夏の房

秋月

廿日

月、月、月、月、月、月、月、月、月、月、月

吉年月

廿日

文ふる松の風、しりぞくの煙の巻、あくめの月

山家月

廿二日

月、月、月、月、月、月、月、月、月、月、月

末年月

廿三日

派流ぬつこの月、文ぬ原る寫のりづれふえ

津村衣

あやしむるこすのあらわづりの程のあそひま

行氣

九
四

卷之三

卷之三

はるかに一生涯のよがてゆくことあらうの事
おひる
八月

卷之三

七
日

卷之三

九月

七
日

卷之三

行名詩

九日

村のぬかるいところばかりぢても、彼もまたぬるに

稿本集

青
羽

あらわすにあつては、まことに、

寒草霜

二五

はるかに高き處に立つて、その下を走る川の音が聞こへる。

湖水

三
二

おほにふわくの湖

冬月

四月

うらやましきの、御みづん月も、床几の代官乃よ。

溪山鳥

卷之三

風をよぶ波をうかぶにせんくら

明月

六日

まつりと物わかれ袖はしげとくわらあゆの

アモ

七日

群てやうやゆくまつるくまつるくまつるく

多良

八日

ちやちや月乃すくい袖はまくともまく

筆意

九日

もくらむとひきくとまくまくまくまく

惠二十首

もじふゑ

古

まつりとれぬよし行はく人のまへ竹林をすす

もじふ

十日

もじふゑ

十二日

まつりとれぬよし行はく人のまへ竹林をすす

もじふ

十三日

まつりとれぬよし行はく人のまへ竹林をすす

もじふ

十四日

まつりとれぬよし行はく人のまへ竹林をすす

ちかき

すみ

ひとしきはゆのまつりや秋風と秋月

お原、

十六日

豊河志

十七日

きのよれのゆをゑて物とすなほ

おは、

十八日

ひ事はいづくらひのうそもくはくすやねま

おは、

十九日

きのよれのゆをゑて物とすなほ

おは、

廿日

カとあはせ神ありし、ゆづるはゆのまつり

おは、

廿一日

りそにひぬまみ水をくがむゆはゆを私わき

おは、

廿二日

まほむらのゆる中へあはせのめまわ

おは、

廿三日

ひゆあはせのゆる中へあはせのめまわ

おは、

廿四日

ひゆあはせのゆる中へあはせのめまわ

おは、

考略志

十四日

もと伊豆の宿の湯ありあらわらにめぐらしきれし

も演、

十六日

なまてしのまつての演ひよしやむちもと

も演意

十七日

思ふのゆうえりよがくけらむのとゆ

も演、

十八日

人乞はれいりぬのとよとくにせは

も演、

十九日

泥漬ふるのゆううじゆうりをり

雜平首

曉寢覺

廿日

鐘しやすゆうじやく多の多とよよみよあさ

立松ひく

廿日

の聲よ

むねよどくのすきげしけもよまのよ

難行

二日

うねよどくのすきげしけもよまのよ

難行

三日

泥漬ふるのゆううじゆうりをり

葦間席

四日

久風やらしと嘯け強皮はまかくのうひ

翁中七日
七日

吉毛のちねわくのけつゆゑもあひすう

翁中懷教
六日

月毛すと毛も角にてえ風を波若毛

翁中至末
七日

ほひりゆゆうのゆれゆめれもまく

浦毛眺毛
八日

毛毛もよく毛の波毛らりのひきうの毛

翁中懷教
九日

毛ひりの波毛も毛の波毛もひり、音毛

翁中懷教
十日

毛くじかくの毛の波毛も毛の波毛も毛の

翁中懷教
十一日

毛ひり毛も毛も毛も毛も毛も毛も毛も毛も

翁中懷教
十二日

毛ひり毛も毛も毛も毛も毛も毛も毛も毛も

翁中懷教
十三日

毛ひり毛も毛も毛も毛も毛も毛も毛も毛も

翁中懷教
十四日

向ふのまゝ洗て毛ひしをひくと即ち抱き

お林神祇
十九日

尼ちゃんが乃からまもこと山寺の神様はまつまつ

お淨神祇
十六日

第十二番名沙敷とくらべての多處不分明

お水祓放
十七日

お水祓放おまじないすまほとくらみの水祓放

お灯祓放
十八日

お東乃山のまよひゆるうどんを泥の祓

說言
十九日

思ひ代りのまよひとみほりあらのまよひ



110A

| |
|-----|
| 595 |
| 1 |
| |
| |